

10 訪欧使節団・徳川昭武

19世紀半ばに欧米諸国と本格的な交流を始め近代化を進めた日本は、1867年に開催されたパリ万国博覧会に初めて参加しました。浮世絵、油彩画、漆器、陶器など多数の美術工芸品が出品され、後のジャポニズムのブームのきっかけとなりました。この時、派遣された使節団の代表を務めたのが、江戸幕府の最後の将軍であった徳川慶喜(1837-1913)の名代として選ばれた徳川昭武(1853-1910)でした。昭武は、慶喜の異母弟で弱冠14歳の青年でした。使節団の一行は、パリで万博を視察したほか、ナポレオン三世に謁見しました。



徳川昭武（国立国会図書館）

昭武は、万博終了後にオランダ、ベルギー、イタリア、イギリスなどヨーロッパ各国を歴訪し、その後パリで留学生活を送りました。留学中の昭武は、一流の教師達からフランス語、馬術、文学、歴史、地理や科学を学びました。また、画家のジャック・ジョセフ・ティソ（通称ジェームス・ティソ）(1836-1902)から、絵画の指導も受けました。

慶喜が昭武をパリに留学させたのは、慶喜が昭武を自分の後継者として期待していたからであると言われていています。しかし、1867年に慶喜が大政奉還をして徳川幕府の時代は終わり、1868年に明治政府から帰国命令が出されたため、一行は帰国することになりました。帰国後、昭武は水戸藩主（後の水戸藩知事、水戸藩は現在の茨城県）になりました。昭武がその後の政治の中心的な役割を果たすことはありませんでしたが、昭武がヨーロッパから持ち帰った知識や経験は、日本の新しい国造りに大きな役割を果たしました。

掲載日：2021年12月1日